

チェリー編 序章 ある日突然

あたくしチェリーでございます。ローレイが復活し、小樽様の元に帰る事のできたあたくし達は4人でまた生活することになりました。

ですがその一ヶ月経ったある日からあたくしマリオネットにも関わらずおねしょをするようになってしまったんです。

はじめはたまたまかと思っていましたが次の日もその次の日もおねしょを…

お布団も黄ばんで臭いもきつくなってきたんです。それに小樽様は優しく慰めてくれるけどあたくしやっぱり凄く恥ずかしいんです。

そのことをジャポネス城にいるドクター・ローレイの話すと、

『貞淑』の乙女回路を持つあなたたちには悪いけど、おねしょをするように乙女回路を改造したの」

「どうしてですの 一体なんであたくしが」

「色々と研究したくて…例えば女の子がおねしょをすると殿方にどんな目で見られるか。

どんなに恥ずかしいか色々とね」

「嫌です!!!そんなこと!うっ…」

その時ローレイが小さな玉みたいなものを光らせた瞬間、あたくしは身動きがとれなくなり息が苦しくなりましたがそれは少しの

間だけでした。

「逆らおうとすると、服従電波を仕掛ける事になるわ」

「ローレイ!あなたって人は…」

「安心してチェリー。チェリーさえよければ小樽の長屋から少し離れた長屋に引っ越す手続きもしてあげるから」

「そんなことで…」

「それともう一人あなたと同じくおねしょをするマリオネットがいるの」

「誰ですの？」

「ルクスよ。彼女もおねしょをするようになるから仲良くやってね」

ルクス?セイバードールズじゃない。今は近所づきあいをしてるから仲はいい方だけけど…

あたくしは色々ショックを抱えながら長屋に帰ります。そして

「小樽様申し訳ありません。あたくし少し離れた長屋に引っ越します…」

「おいおい家を出るってのかたかが寝小便ぐれえでよ」

おねしょくらいでって小樽様優しいのか薄情なのかわからないけど…ブラッドベリーが

「小樽。チェリーも恥ずかしくて仕方ないんだ。それにずっと会えない訳じゃないんだろ」

「ええ。もちろん朝ご飯も一緒に作るし、小樽様達にお弁当も届けて晩ご飯は一緒に食べます。ただ皆さんと一緒に寝るのは」

「そっか分かったよ。落ち着いたらいつでも戻って来いよ」

「はい…」

こうしてあたくしは自分の荷物をまとめて小樽様の元を離れて行きました。引越し先は近くだけど凄く悲しいです。

チェリー編 第一章 チェリーの朝の日課

あたくしはローレライのすすめで傘張り長屋から離れた長屋に引越しました。でもおねしょは相変わらずです。

「はぁ…またやっちゃいました」

これで十日連続おねしょ…でも小樽様が近くにいないからなんだかホッとします。それに

「あら おはようチェリー」

濡れた布団を運んでいるルクスがあたくしに挨拶します。

「おはようございます ルクス」

「今日も派手にやったわね〜」

「ルクスこそ〜」

自分と同じおねしょ仲間がいるからもっとホッとしますけどあたくしは

「ごめんなさい。また小樽様の所にいかなきゃ」

「もう大変ね」

そうです。あたくしは小樽様達に朝ご飯を作らなきゃいけないんです。それは今までの小樽様の長屋での日課でしたから。

「おはようございます 小樽様 早速作りますね あら」

ちゃぶ台には4人分の食事が

「ごめんよ 今日俺が作ったんだ」

「え〜どうしてですか」

「なんかさ わざわざ朝食を作ってもらってばかりでたまにはと思ってさ」

「も〜小樽様ったら〜 あ、でもこの献立では栄養が偏りますよ もう一品作らないといけませんわ」

「いいよ別に」

「ダメです!元々これはあたくしの仕事なんですから!」

「わーったよ ったくかなわねえな」

そして献立を作ろうとしたときあのお邪魔虫が

「おったるく〜ん グッモ〜ニング」

「花形!」

「あれ〜おねしょたれのチェリーまだ料理終わってないのか〜。な〜んだおねしょの後始末に手間取ってみんなの足を引っ張ってんの

かな〜」

「花公。てめえ!!」

「花ちゃん。ひどい」

ライムとブラッドベリーが花ちゃんに怒っている時あたくしは無言でゆっくりと花ちゃん

に向かい

「バカ～」

「あひえ～～～」

とフライパンでお空の彼方に飛ばして行きました。なんだか久しぶりですわ。

そして朝ご飯を食べ終えたあたくしは今住んでる長屋に帰り小樽様達のお弁当の準備をするまでは少し退屈するんです。

そんな時なんだかアソコがうずいてしまうんです。そしてあたくしは自分の下着に手を当てて

「あうう。また…どうしたのかしら」

そう。一人暮らしを始めてからというもの小樽様を思いながらいやらしいところをなでてしまうんです。これはローレライが言うには

「オナニー」というもので年頃の人間にはよくするものなんだそうです。

「おお、小樽様寂しいです。あふう…」

でもその時あたくしはおしっこをしたくなりました。実はマリオネットであるあたくしがおしっこが出る様になったのはローレライが

食べ物や飲み物がおしっこに変換する機能を付けたからなんです。

そのためはじめはおねしょだけかと思っていきましたが寝てる時以外もおしっこを出しているんです。でも勘違いしないで下さい。

あたくし昼は漏らしてはいません。ちゃんと廁（トイレ）で済ませてるんです。でも

「ああ～～～ダメ～～～我慢出来な～い」

ふしゃあああとおしっことおしっこの様でそうでない液体を一緒におもらししてしまいました。ああ畳が…

でもあたくし凄く気持ちよくてまた小樽様のために頑張ろうって気になるんです。

「さてお弁当作らなきゃ」

はじめはローレライを恨んだあたくしでしたが、今では何だか感謝の気持ちでいっぱいです。そうだ!今日はローレライにもお弁当を

作ってあげましょう♪

ルクス編 序章 転居

こんにちはあたしルクス。今テラツーは女性も復活して時代は変わりつつある。誰かの言葉だけどね♪

まあそれは置いといて、あたし達セイバードールズはジャポネスに社会勉強に来てるの。

かつて憎むべき敵だった間宮小樽やライム達と

近所づきあいするようになって仲良くなったの。

でもね、最近あたしときたら朝起きたらお布団がぐっしょり濡れてるの。これは人間の生理現象の「おねしょ」っていうらしいんだけど

マリオネットのあたしがおねしょってどうかしてるわね。

そしてそのことを以前あたし達セイバードールズを点検したドクターローレイに話したら

「『貞淑』の乙女回路を持つあなたたちには悪いけど、おねしょをするように乙女回路を改造したの」

「あなたたち？それはあたし以外の誰？」

「チェリーよ。」

「そう」

「あら嫌じゃないの」

「ええなんだか気持ちがおわ〜んってして悪くないかなって思っ」

「そう、それは良かったわ」

「でもティーゲルとパンターが臭いって怒るのよ それならティーゲル達もしちゃえばいいのに」

「ティーゲル達はあなたと乙女回路の性質が違うからそれは無理だけど」

「そう。でもそれだとティーゲル達から嫌われるわね」

「大丈夫。しばらくの間ルクス達の家から近い長屋に住める様になるけど。どうかしら。」

「それならいいわね。楽しくなりそう♪」

「よかった。ありがとうルクス。」

そしてあたしは引っ越し事を決めて、自分の荷物をまとめてティーゲル達に挨拶したの。ティーゲルは、

「ルクス。ちゃんと仕事にはくるんだぞ」

「分かってるわよ」

そしてパンターは、

「おねしょに手間取って遅刻なんかしたら許さねえぜ」

「もう馬鹿にしないでよ」

ティーゲル達の厳しい注意を受けてあたしはローレイがすすめた長屋に住み始めたの。

ああ…一人暮らしですのおねしょってどんな気分かしら。明日が楽しみ♪ふふっ。

ルクス編 第一章 快感

ピピピピピ…目覚ましの音になってあたしは目覚めた。そしたら

「あや〜今日もいっぱいしちゃった。」

ティーゲル達が住んでいるマンションから少し離れた長屋に引越してから初めてのおねしょ。いつもならティーゲル達が臭いって

言うけど…

あたしはおねしょの臭いが大好き♪お布団の他にパジャマ。パンツ。みんなあたしのおねしょでぐっしょり♪

「誰にも叱られないから、乾かさなくて置くのもありかな？」

そしてあたしは布団のシミの部分を見ると、何だかあたし凄いなって思うの。

「ああ♪おっきなおねしょ可愛い。となるとパンツも可愛くしないとダメかな？」  
あたしは少しの間自分のおねしょでうっとりしちゃった。さて、お布団洗って干さない  
と遅刻しちゃう。ティーゲル達に大目玉ね。あたし  
はタライを使って洗濯している途中  
「あら、ルクスおはようございます。」  
「あ、おはようチェリー。」  
「ルクスってば、一晩に何回もおねしょしちゃってますわね。」  
「あら、どうしてわかるの」  
「そのお布団を見ればね。それにあたくし調べたんですけど、おねしょは一晩で2~3回し  
ちゃう人もいるらしいですわ。」  
「だからこんな大きいのね。じゃチェリーのおねしょは…」  
「失礼ね。一回分だけよ。っってもう言わせないでよそんなこと!」  
「何怒ってんだか…」  
「あ、いけない。もうすぐ朝食の時間ですわ。じゃ失礼します」  
「あ~あたしもお仕事に遅刻しちゃうわ。」  
チェリーと話をして時間食っちゃったからあたしは急いで洗濯してあたし達セイバード  
ールズが経営している店「ファウスト・ダイナース」  
に向かったの。でもティーゲルとパンターはもう来ていた。2人ともカンカンね。  
「遅いぞルクス。」  
「まったくギリギリじゃねえかよ!」  
「ごめんなさい2人とも。さあ早速仕事に取り掛かりましょう」  
「ああ」  
そして休憩の時間になった時、ティーゲルが  
「なあルクス今の生活が気に入りそうか？」  
「そうね。でもまだ始まったばかりだし…」  
「まったく、ローレライも変な機能付けさせたモンだ。」  
「パンター。口を慎むんだ。ローレライは何か考えがあってルクスにおねしょをさせてい  
るんだろう。」  
「そうなかあ…」  
ティーゲル達は少し疑問に感じながら仕事を戻りそして今日の仕事は終了。あたしはティ  
ーゲル達と帰り道は違う。けどティーゲルは  
「ルクス。たまには帰ってくるんだぞ」  
「ありがと。帰ったら飛びつきりのご飯を作ってあげるからね♪」  
そして今の自宅に帰ったあたしはお布団を取り込みちよつとだけ臭いを嗅いでみた。くち  
ゃい…でもやっぱりクセになっちゃいそう。  
明日もいっぱいおねしょ出来る様に神様、いやファウスト様をお願いしてあたしは眠りに

ついたの♪  
ふふふ♪幸せ。